

神憑り呪殺 三田 サスペンダー

第三稿

三日月つり

2016/09/15

【登場人物】

我々……自分とあと誰か。常に事の次第を見ている

ラズベリー氏……寝る

麴町……ヘタレ

愛玩具……轆される。喘ぐ。少年のようでもあり少女のようでもある

ラ不アエロ……偽物である

キツツキ……キツネである

怪獣1……放射能の吐瀉物を撒き散らし調子に乗る

怪獣2……空を飛び撃墜される。前は都内高所で繭だった

怪獣3……ヘドロ

怪獣4……快感。一本爪に3D眼鏡

うつぼ……中に入れる

アンガス……若い。短パン。最近は若くなくなった

ロック皇帝……エレキに逝かれてる

ドラッグ飛行艇……薬物の作用で空が飛べる乗り物。意志があるよ

エンド……遠藤くんであり遠藤くんの死期である。かつこいい

数寄屋橋……かつこいい橋

サスペンス皇帝……宙吊りにされた皇帝。不安感と焦燥感で他を圧倒する

警察……優先度1. 身内を守り 2. 法を執行し 3. 無実の民間人を守る

正義……悪である

ロケットフォース……砲団。暴走族にロケット砲をもたせた程度の存在

デッドモンスター……偏差値1の学校にすらいけなかった者達の集う族

ミケランジェロ……ギューニヤンの女部分である存在の父親。必殺技を持つ

YKZ……心霊以上の怖さ恐ろしさを体現する存在

TNHHK……TENI NOI HEYI KICKASSI 10 カウントを嫌がる

CIA……チキン・アイロニー・エンジェル、鶏哀天使のこと

MIS……マイ・インタビュー・5人衆のこと

KGB……かぐや姫のブリ大根

K教……蚊を取り食う宗教

Y教……茹である料理の宗教

I教……椅子でラム料理の宗教

○ラズベリー邸／室内海施設／深夜

中近東の民族衣装に、吸血鬼のマントを纏ったラズベリー氏は、海用品と戯れる。

排水ポンプを取り出し、海に見立てたプールの水を吸わせ、撫で擦りながら唱える。

ラズベリー氏「チューチュー吸い込む、そう、ポンプ。そう、ポンプ、浮き輪ポンプ、深く飲む。ポンプ、ごくごくんだよ、そうポンプ。海水を飲む苦しさだよ。」

ラズベリー氏、悦楽の表情を浮かべ、シャベルに話しかける。

ラズベリー氏「惑って来たかい？ 溶けちゃうかい？ 光が見えたら、逝けちゃうよう？ 幕は開くから大丈夫。君がいなくても世界だよ。到達するんだシャベリーナ。メロンはデリシヤス、ペロンは尻舐めシヤス」

続いてパールへ巻き舌を見せる。

ラズベリー氏「バルルン、バルルン、バルルルン、親愛なるバルルンよ、君は有能だ、そして貝を掘れますね、それはとても素敵なこと、味わいの心、(巻き舌で) プツデデデディングを食べてあんまいあんまい(喘ぐ) あんあん甘あいトロトロとろみのトロピカル、ピカピカリンのピツカリライト、黄色い光がトロミを突き抜け、天高く輝かせるんだその甘さ、だから舐めるさ、だからベトベト、食べるんだバルルン、バルルン」

プリンまみれのパールを股間に擦りつけながら、安心した表情になってラズベリー氏は寝る。

しばし寝ている。

思い出したように起き、その場で駆け足、ぐるぐる回りながら叫ぶ。

ラズベリー氏「忘れていた！ 用事を！ 滾る眠さ！ 玉ねぎを食べたい！」

ラズベリー氏、玉ねぎを包丁で刻んで涙を流し、それをタオルで拭くと、サイドカーのサイド側へ乗り込み、バイク側の自動運転で走り出す

ラズベリー氏「くくく、待っておれ、今からお前に、お前のお腹に、プリン匂いのついたこの奇妙なバルバル、バル、バ、ブブブ」

言い終わらぬまま舌を噛み切り、口から血を流してフガフガしながら、ラズベリー氏は、ヘタレの麴町の所に向かう。

○麴町の巢

ラズベリー氏はサイドカーからバイク部分を切り離し、麴町の巢の扉に突っ込ませ爆破する。

空いた空間にサイドカー単体でコロコロと入っていくラズベリー氏。

麴町、怯え、手足を震わせ顎をガクガクさせ失禁しながら登場。パジャマはびしょ濡れ、床には水たまり。

ラズベリー氏「フガフガ、フハハ！ヘタレの麴町くん、こんばんは。今日は君を恐怖のズンドコへと誘いに来たよ。ハハ」

麴町「うう、恐怖は怖い、やめて」

ラズベリー氏「私は君を圧倒的に恐怖させる恐怖の愛玩具の恐怖を見せに来た！」

麴町「うう、恐怖の愛玩具の恐怖、怖い、やめて」

ラズベリー氏、高笑いしながら辺りを見回し、愛玩具を連れてくるのを忘れたことに気付き、血相を変える。

ラズベリー氏「待っている」

麴町「うう？」

外へ走るラズベリー氏。いつまでたっても戻らず、更けた夜が明け、空には太陽が昇る。麴町は寝ていた。

ラズベリー氏「起きるのだヘタレよ、私は君を圧倒的に恐怖させる恐怖の愛玩具の恐怖を見せに来た！」

傍らには愛玩具。

麴 町「うーん、なんか、待ちくたびれて怖さが無くなった、もう明るいし」

ラズベリー氏「黙れ下郎！」

ラズベリー氏は麴町を鞭で打つ。

麴 町「ぎゃん」

ラズベリー氏「今から私は君を圧倒的に恐怖させる恐怖の」

愛玩具「ねえん、もう待てません、早く愛玩してくださいよう愛玩ん」

ラズベリー氏「フッフ、愛玩愛玩、愛玩するんだ愛玩だ、さあうつ伏せで背中をはだけさせ、腕を前から上にあげて、背わたの運動！」

愛玩具「ああーっ！！ そんな！ そ、そんなーっ！！」

ラズベリー氏「フッフ、私は信じられない不可能な力を使って、うっ伏せの人体の腕を真上に伸ばしたのだ！ このことにより愛玩具の肩関節は碎け、鞣した革の形が性的な美しさを増すのだ！！」

麴 町「な、鞣す？」

ラズベリー氏「そうだ、皮を鞣すのだ、薬品で皮を腐敗や乾燥から遠ざけ、美しい状態に保てるのだ、しかも性的に！」

麴 町「性的に……それは観たい」

ラズベリー氏「そうだろう観たいだろう、とっても性的、とつても観たい、とつても恐怖！ 恐怖！ 恐怖！」

麴 町「うわあ、助けてえ」

ラズベリー氏「もう遅い！ もう遅い！」

ラズベリー氏は愛玩具を鞣しだす。愛玩具の肌は艶めき、官能の息を吐く。

愛玩具「あん、ああん、あつ、ああん、あはっ、あつ、ああん♡」
恐れ慄く麴町。愛玩具は益々蠢き喘ぎだす。

愛玩具「ああっ、ああっ、ああーっ、あつあつ、ああーっ、ああーん！！」

怖れながらも興味津々の麴町は目をギリギリさせ見つめながら怖れる。

次第に様子が代わり、生きてまま鞣される苦痛で絶叫の愛玩具。

愛玩具「ギャー……！！！」

驚愕し、ガクガク震えだす麴町。

ラズベリー氏「ふふふ、生きたまま鞣されて、生きたまま死んで

シンデレラ、ふはは、ふひははは」

苦悶の愛玩具

愛玩具「ギャツ、ギャツ、ギャー……ッ！！！！！」

絶望の愛玩具、目をむき出し、舌は飛び出し、体中の穴から液体が吹き出す。

麴町の穴からも液体が吹き出す。

ラズベリー氏は怯える麴町を見て絶頂に達した。

麴町はもはや動かない愛玩具を見て、次にラズベリー氏を見る。

麴町「おそろしい、あの性的に魅力的なあの子を性的に機能できなくしてしまうラズベリー氏、うすら怖ろしい、うすら卵ほしい、彼の股間の世界一タワーが僕を求めて伸び続ける、ああ、怖ろしすぎる！この恐ろしさを止めるため、人は、僕は、君は、僕の、身を守って身を削って、さるりら殺す！すめらか壊す！すべらかすべらか斬！存！善！」

麴町は靴に仕込んだ刃、肘に仕込んだ鋸、でラズベリー氏を攻撃し、続いて心に描いた正義幻想を具現化する謎の善ポーズ、両手で弧を描き、座禅を組み、そのまま後転し一回転したら首の骨が折れ、叫びながら狂気の攻撃を畳み掛ける。

麴町「体中が体液にまみれベトベトになった僕は世界一かわいいい！今、必殺の、ベトベト・フォン・キュート！！！！！」
ラズベリー氏は全力で防御する。

ラズベリー氏「小癩な！私には愛する妻！愛人！三人の娘！愛人の娘！そして産ませるだけ産ませて顔も知らない娘があと二人いる！その力をくらえ！アイラブ・ユーラブ・ラブリー・ラズベリー！！」

ラズベリー氏の全力の攻撃を、麴町は全身全霊で防御する。攻防が終わり気が済んだ二人は、スッキリ爽やかな顔。

麴 町「ふふふ」

ラズベリー氏「ははは」

二人は体液まみれのまま抱き合う。そして二人だけの晩餐会をする。昼十二時から。

ラズベリー氏「二人の神、ラ不アエロに、乾杯」

麴 町「乾杯！ ラ不アエロのエロはエロのエロ、だね」

ラズベリー氏「ああ、俺たちがラ不アエロだ。だからラ不アエロの好物、キッツキを食べよう」

麴 町「キッツキという名の、キツネをね」

ラズベリー氏「ははは」

麴 町「ふふふ」

楽しそうに笑いながら二人は手に手を取ってラ不アエロの城へ歩いていく。

○ラ不アエロの城

怪獣^一、怪獣^二、怪獣^三、怪獣^四。が現れる。暴れる。

振動で城が傾く。

怪獣たちは晩餐会を開き、会場や奥室で愛しい、食べ合う。

実は最初から全てを見てきた我々は感嘆する。

我々「食物連鎖だ。まだ体液まみれの二人が来る前で良かった、彼らが来ていたら、獣たちは愛を交わす喜びを感じることも出来ぬまま、異臭によって恐慌し、城ごと世界を食べてしまっていただろう。そしてラ不アエロの火種は消され、贅と山河と国家と国民、灰燼に帰すは必定。なればこそ侍に斬らせるか、忍者に消させるか、奇術師に消させるか、本に閉じ込め封印するか、麴が一皿、箸が十二組、ガムテープの切れ端、露骨な値引き交渉、こういったもので正常な連鎖へと事を運ばねばならなかったであろう。我々はどんな困難な状況にあるうとも、決して諦めることなく、残された再生への手がかりを見つけ実行してしまうのだ」

我々は宣言し、城の傍らにいたうつぼの中に入る。
我々、自分がタキシードであること以外は何名いる
のかどういいう姿形か認識できないところの総体であ
るところの我々が、全員すつぽりと入ることができ、
喜ぶ。

我々「やれ、めでたや、それ、めでたや」

うつぼの中で歌い舞った。うつぼも喜び舞い踊る。

我々とは違う地点からの観測を行う短パン、通称ア
ンガスが、それを見届ける。

アンガス「巨大な化物とは違う、人間の等身大の化け物たちが、
予め備えられた予兆に呼応して、ついにつぼ内へと進
み入った。世界の罅を塞ぐ行為を的確に行える霊格の高
い存在がまだこの世にこんなにも存在していたとは驚き
でしかない。私も彼らの崇高な精神、再生への手がかり
を、受け継ぎ、生きよう。さあ召喚だ」

ロック皇帝、現る。

ロック皇帝「やあやあ、我はロック皇帝、今夜我はロックンロー
ルなるぞ」

エレキギターにアンプ最大音量。世界が轟く。

ドラッグ飛行艇、現る。

ドラッグ飛行艇「薬物を推進する。薬品で空が飛べる。それが私
だ。君も薬物で飛ぼうじゃないか、それがサスペンス。

これがサスペンス」

サスペンスの、誓い。世界が誓われる。

かっこいいエンド。

エンド「やあ俺、遠藤。おれの最後はエンド。遠藤エンドでバン
トを決めたら、遠藤エンドに遠藤バント。エンドバント
の遠藤弁当」

遠藤がかっこいい。世界が遠藤でエンド。

かっこいい数寄屋橋。

数寄屋橋「そう、銀座だね。うん。日比谷のほうにも行けるな。

そういうことだ」

数寄屋橋からこっち、かっこいい。世界が数寄屋橋。

最後の真打ち、カッコいいサスペンス皇帝が、世界の全ての不安と、世界の全ての混沌と、世界の全ての期待と、世界の全ての焦燥感と、もいちど世界の全ての不安を伴って。ついに、ゆったりと、誰よりも大きく、誰よりも小刻みに震えながら、ずいずいっと寝転びながら震えつつ、召喚された。

サスペンス皇帝「ふはっ、はっ、ふはっ、ふはふは、よろれい、よろれいひ、ロープが首にかかったままつま先立ちして、サスペンスだよう、ふはっ、ふはふは」

サスペンス皇帝は怯え、不安がり、焦燥感を伴っている。

ロック皇帝「その怯え、カッコいい！」
ドラッグ飛行艇「君の薬物、脳内薬物。これぞサスペンス。それがサスペンス」

エンド「遠藤的にかっこいい！」

数寄屋橋「うん。つま先立ちって、橋のようだ。そういうことだ」
アングス「短パン的にもかっこいい」

うつぼ「我々のにもかっこいい」

怪獣「我が放射能よりカッコいい」

怪獣「我が繭と糸と羽よりカッコいい」

怪獣「我がヘドロよりカッコいい」

怪獣「我が一本爪よりカッコいい」

やっと到着したラズベリー氏と麴町も感激し言う

ラズベリー氏「性的にかっこいい」

麴町「僕よりヘタレだ！」

サスペンス皇帝は皆の賛辞を受け、目を涙で輝かせながら言う。

サスペンス皇帝「ありがとう、皆、ありがとう。今こそ私は言わねばならない。実は、我がこそが、ラ不アエロだったのだ」
一同「えーっ」「なんとー」「そんなまさかー」「いや俺はわかった」

サスペンス皇帝「やつぱりそうだと思っていてくれたね、皆ありがとう。私は神として存在していた自分に飽き飽きし、サスペンスフルなSM趣味にのめり込んだ。そして常につ

ラズベリー氏「ばかな！」

麴町「そんな！」

警察「よし逮捕」

詰められる手錠

ラズベリー氏「ん？」

麴町「あれ？」

我々「我々かよ」

我々の腕にはまった手錠は、自分一人だけ詰められているようにも、我々皆が詰められているようにも、見えた。

○刑務所／我々房

我々「警察は当初、殺害容疑と言っていたのに、今や我々は性犯罪者として別件でも捕まってしまった。そしてついに今日、懲役を食らってしまった。しかし本当のところ、サスペンダー皇帝はサスペンダーで昇天できて幸せだった。このことは警察も皆わかっているはずだ」

我々は刑務所のあらゆる役職の人間に接近遭遇する。

我々「サスペンス皇帝は自分から喜んで死んでいったんですが？」

あらゆる立場の人「知ってる知ってる、みんな知ってるよ。裁判官だって検察だって、君らを捕まえた警察官だって知ってるさ。ただ、給料分の働きをしてるってところを周囲に証明しておくために、形だけ、犯人を捕まえました、という体にしてるだけなんだから」

我々「じゃあ我々をここに閉じ込めておくことはできませんよね？」

あらゆる立場の人「そりやそうさ、逃げても追わないんじゃないかな、脱出ゲームしてみたらん？」

我々、確信のうなずき。

我々「そう、やはりサスペンス皇帝は誰からも、快樂や嬉しさの思いと共に死ねた喜ばしい存在だと認定されていた。

我々は、あらゆる立場の人の協力を得て、刑務所迷宮からの脱出を、ゲームクリアした。」

刑務所から走り去る、我々。

○自由社会／繁華街／人の波間

自由を謳歌する我々。酒を飲み男女と会話し楽しむ。しかし正義はやってきた。

正義「お前たちがラ不アエロを性的に貶め、命を奪った犯人だな」

我々「ちがうよ？」

正義「嘘をつくな！！」

殴りかかってきた正義、ある程度反撃しつつも繁華街をすり抜け逃げる。

我々「誰からも追われないと思っていた我々。しかし、正義面をした連中から、お尋ね者として追われてしまっている」

○宇宙のどこか

我々は逃げて逃げて、宇宙中を旅する。

我々「宇宙中どこへ行ってもぶちのめされる危険を犯す、サスペンサー。我々はその、サスペンサーになってしまった。」

旅先の人「よっ、サスペンス大名」

我々「サスペンスフルに危機と不安を感じながら旅していたら、我々にはサスペンス大名の異名がついた」

いつの間にか我々に含まれていた麴町を先鋒に、居場所を探す旅をする我々。

我々「この星も、だめか」

我々「この地域も」

我々「こんな辺境の地ですらもだめなのか」

その辺境の地で我々を狙ってくる、正義の一部、ロケットフォース（砲軍）。そしてデッドモンスター（死んだ怪物）。

我々「塵屑衆（ゴミクス）め」

ロケットフォース「ふん、豚がよう」

ロケットフォースは大砲を麴町に向けた。

麴町「くっ」

避けても避けても撃つてくる。

デッドモンスターは麴町の後ろに火をつける。

麴町「うわああああああああああああああああああああ」

ロケットフォース「焼け死ぬ豚野郎、焼豚だ！」

我々「麴町ー！！！！」

無残にも麴町の体は炎の中に沈んでいく。

我々は涙を振りきって、逃げ延びた。

我々「麴町は豚と呼ばれて焼かれて死んだ！迫害の正義を行使

された！」

我々「えーん」

死んだ麴町を除く我々は泣きながら、あらゆるメデ

イアを使って、情報戦を戦った。

我々「問題の正体は、正義の価値観そのものだ。正義を唱えた瞬間、それに反するものを悪と規定し、生まれさせてしまう」「問題とは、問題視をして問題でないことを問題化するお前自身なんだ」「価値観の相違を尊重できなければ、人はいつまでも他者受容のできない閉鎖人間のま、生きた人生を生きる前に死ぬ」

それでも何も変わらない。

デッドモンスター「死ぬえい」

ロケットフォース「爆撃！」

我々「そうか……対話はあきらめた」

丁重かつ紳士的に殴って蹴って黙らせ知らしめ理解

させ、去らせた（この世から）。

我々「紳士な我々は清く正しく宣言します。僕達私達は、永遠にスポーツマンシップに則り、ここに神憑り呪殺から、卒業することを宣言します」

大歓声、大拍手。

YKZ「おめでようっ」

TNHK「おめでようっ」

CIA「おめでようっ」

MIS 「おめでとう」

KGB 「おめでとう」

恒久平和 「おめでとう」

✕ 教 「おめでとう」

▽ 教 「おめでとう」

┌ 教 「おめでとう」

全てからの祝福。祭りの高揚。いつのまにか我々全員のうちに加わっていた、かつてこの物語に出てきたラズベリー氏を除く全ての存在達、皆がおめでとう嵐を受け、魂の開放、再生、解脱、神秘体験、全てを経験している。

その影で、我々の中の我々であるミケランジェロはミケランジェロ「よかったね、みんなみんなよかったね、ぎゅーにやんしたいね、ぎゅーにやんしようね、みんな、みんな、ぎゅーにやんだ、生まれも救いも、ぎゅーにやんだ」全ての罪を一人で背負って空高く昇ったまま、ミケランジェロは死にました。

そして奇跡、死した麴町の復活！

麴 町「あれえ、僕は生きてるの？ 焼豚は僕じゃないよ、僕は人だもの。焼人だよ」

そこにラズベリー氏が偶然、宇宙船で通りかかる！

奇跡の邂逅！

ラズベリー氏「麴町……麴町——！！」

麴 町「あつ、ラズベリー氏、あつちよつと、あつ、それは気持ちいいよ、あつ」

我々「接触！世界よ！ありがとう！幸福よ！世界秩序へ！世界は安心し、嬉しく豊かに育っていきけるようになった。やったねラズちゃん♡ やった、やったよ、サスペンス皇帝を殺されなくなるように洗脳し、殺し、しかも罪を免れたよ、やったね♡」

瞬間、ラズベリー氏はかかる不幸の全てを砕き、麴町との愛を、我々に魅せつけた。

終